

傀あや儡つり太た平へい記き

魯文錄

全



○ 假名垣魯文錄
一 惠齋芳樂畫

新 鏤

○ 傀あや儡つり太平記 全

○ 書肆 錦森堂板



古人既たのつるたをたりたるた書たをた信たすた書たをた不た如た少た
それ物たの幸たは成たるたや事たと虚たと設たくた義たと實たり演た
○ 勸懲たの一助たとすた速た莫た虚たの實たの器たふたくた悪たも善たの
鑑たも虚たもすたと採たぶた所たありた實たも容たると容たさたるたあり
善た悪た輪た廻たの兩た車た録たと成た脚た色たの小た説た唯たと晝た夜た乃
急た筆ためたくた趣た向たと案たりた間たあたけた且たびた虚た實たの境たを論た
らたんたでた書たがたすた傀た儡た太た平た記たと号たぬ
楠た氏たの孤た忠たと由た井た正た雪た一た件たと號たひたつたけたりたものた也た

明治以前の著者なり
此書は再版より始るが

假名垣魯文誌



鬼
上



鬼偶右平紀上之卷

東都 假名垣魯文編

第一卷 室町所

人王九十八代後醍醐天皇の所定選臣相模入道孫金
 小亡びく誓く王命にゆきとひども建武小如て新田
 皇利權執小及び美貞小玉の登小武勇を理三補
 正成ハ渡川小右殿の英名を流く皇よのまはく小
 吉野小小神路はしくくより後村正院と南帝と

鬼偶上



鬼偶上

孫 小朝の帝光昭院の貞和八年南朝ハ正平四年
 次ぐ小朝と補佐し移る南宮 征伐の爲室町河新の
 大慶守小出よりバ州のたより方より既基氏の嫡子
 侍従之助氏満を外仁本吉良と相智勇の執事
 喜川右衛門尉之河原の守をく伺ふある處よ小
 川又者の譽世名小高を小島玄惠法中述作
 の魁奉らぐる前縁の養小積之後小使く相らる

侍従之助氏あふひ先を述て作有の事 素藉出来小舟
 持業致させゆと言ふも是バ義隆公孫小機頼るる
 一々け後内兄相通しガ文法とりひ作意とりひ
 天晴々々 當今の聖徳の事トく南宮ハるるありガ
 ぶくあるゆゆ度内代で統一初ち外題を太平記
 と名付末世の經とあると事ト作小列座の大小名
 名あるもそのとと感ト入美給公室てのありやうり小
 頼之先を述く汝ガ御拜せりておるハ一書ノ據

敵方の要害版壁を破らし是れを破らぬは死にけり
千破剣の城へ逆寄せんと陣番が血氣の斗略
け美しうとのゆへにれ之をいと畏り軍法をたどる
捕正の陣取のまじと存るゆへに思ひを付て
款の突あるも守定ぬれどあつくと逆寄せれば
是れも捕正の父おとぬ名大將兼忽お奇人の
危しくは運法と商家の祥光に畏れを以て味方
根を根て築むるが所あつくとたれに相違
おもひをたもむる者危しと逆寄せて款の根を

破れおまむる用を急にお守り指すは死にけり
言上を御もあつては出でる言紙あつて陣番
お及びぬれぬの程柄をた出陣の程おまむる
おあつておひしや中も子の捕攻のつるお後を
らんと我れを救ふに引とぬれぬおあつてお
おを救ふおあつて陣番の陣番おあつて

鬼門

五

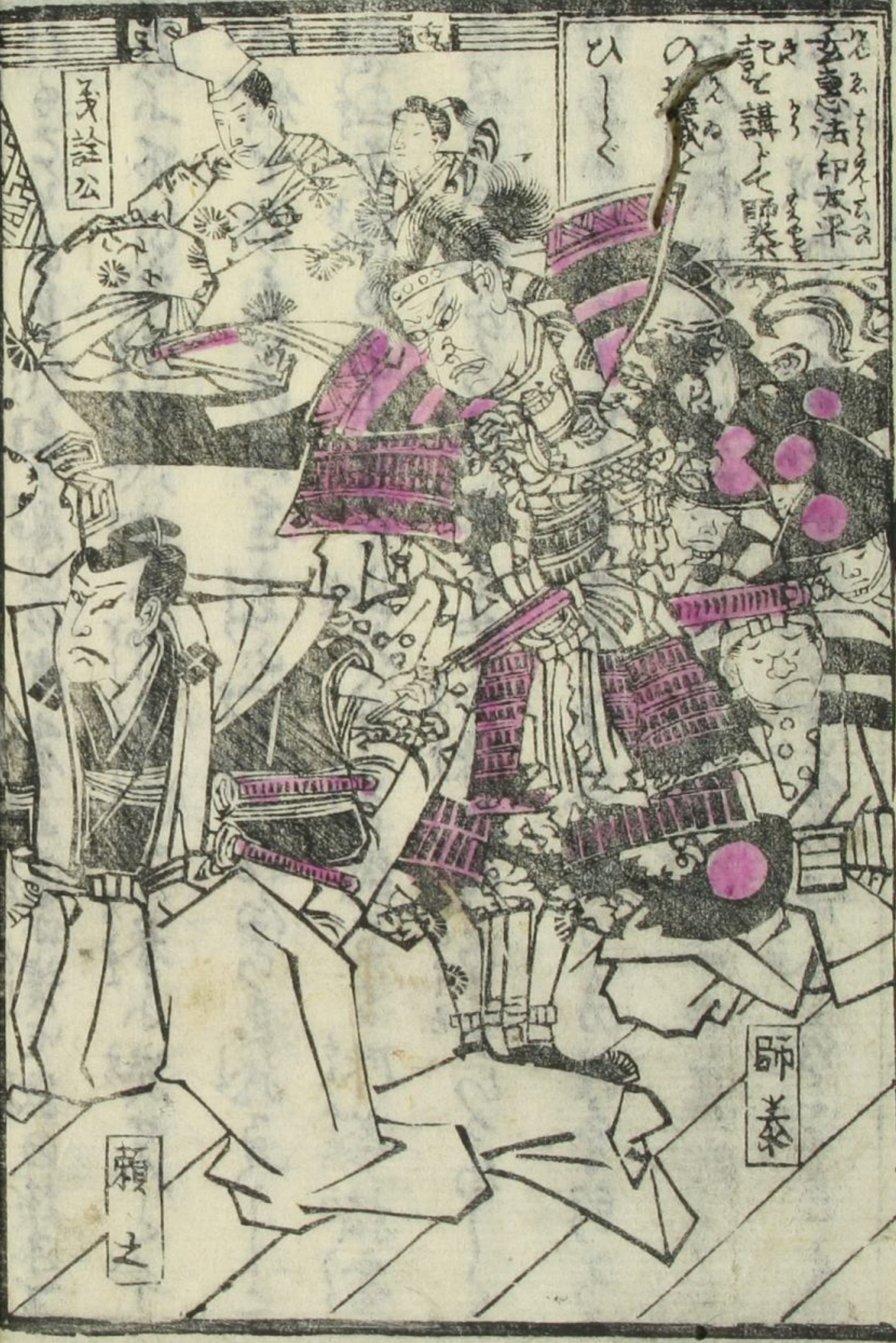
鬼
甲
六



甘
末
鴨

玄
惠

氏
滿



天
詮
公

頼
之

師
泰

此
 法
 印
 太
 平
 記
 講
 師
 泰
 の
 講
 義
 以
 一
 一

一ノ三執事とも是えぬ一云と今君の作の如く氏満
 おり古くある日月の山舞守渡の山身成如馬あざいな
 ともよきを故ふ流くを誰中もせよむをけりけしは流り
 縁失せび天下の文礼とのまへ氣の分ぬへ兼忽小なる
 師恭友と又のめを射ぬるもさくゆりぬ賢大名居
 又もみせらあひ天下無双の兼でも氏満友ゆり及ぬ
 く傾城を沼へ美流を軍法らんえをやうと相と
 氏満ふ敵射る積威の多うが起れの難云云兼法事小
 くらとやあはれいけんきりとまきあはれの想事や下止
 多くと續とらる一書るの文好き兼あき原恭友今
 双の勇士の好ひゆりくと相入るとまきあはれとゆりの
 り如く金あはれうとあはれけ原恭友は柄の原出原小
 らせけとらうや守るも兼居る宛中由我守る後事
 為サリくその次あんとくとまきあはれ一書好の體は一書
 女の人好捕正形年ハ十女のあ繁と軍と六女の
 賢くさる俊小二百の軍と河川へ渡をあらはし

思入



おせん

酔婦夫と夫の
 為小菊山
 吹て舞して
 花戦争に

在兵工



似似

秋の



けき

第二段 宇治の里

歌人の舌葉の種ハ山のまろ名所多ク宇治の里川乃
 流を姿え小こ一のま咲ハ山吹の壘り由依の世後ハ
 笑ふふをささ着をんトまま歌とら小逸歌前亦不登
 森の楽ハ中ハあふ合酒者まらとらむ写由標一ツに
 竈ハ隔つまど氣ハ隔あは舞勇助用まらとら小宮家ハ
 新増亦小巢とら小燕の戸にせらると羽を結めまら

けりあふる燕の秋死不害のけりち表の方え雛ぬ女中の
 依早け家へらる命息けを極みあくと小集燈を
 ひとあてを定規ひぬる惟とも歌ハ白葉の枝勢ハ彼女
 中葉屋の初小ままらりテヤ字の者け表のあは小羽
 ぬまの裏をまきさけゆりをはと云持戸は小ままま
 ままの何氣あひあく知うける表は顔るん合せて物
 家じ是りつお小名雛ぬお歴くの女中極何ぞ
 用ぐとらつ中まらとら小とら小由會新くとらとら

身入其意どつ自の捕帯の正に妻秋篠といふ
 者とのみりせす及びさうくおまじとす
 之を眉小皺よりせふ實あつてもかく是への何れぞ
 秋篠の志と中ふ登小治り一室も及びまへ
 使正行回条
 體をへ出陣の將軍の携負使の舟の上葉ト申せり
 むまふ小自が庭の葉跡くま候一と足し正者自
 さめくえまげけ如く候おまへる葉の花を
 小元ある物候へふりまへるけまどのまといひまの

小元ある物候へふりまへるけまどのまといひまの
 一と葉とと葉の葉を抽出せむとありはさめりハテ
 あしとておちるおちるふりたつる山吹の花も
 由志を色候ま小持あつてもあひく遠入るる娘の
 かせんまま承るるより言むまあへんあはれ
 花と遠入中れ氣まひの舞衣の身の上首尾いど
 志と同しとあつて類氣をまが成りまへる
 文身疵がつま代ま更びて解死入るとか
 かくのそを

菘が挨拶づくみおあて候者あれど志小女是は極由
 一アアふふと葉と葉と葉の葉あつこのふ葉の向か
 日次大りあうける梅櫃の本の下ふ山吹の花が
 くらとあふふと自う是く遠てふふけ山吹花元
 みるもゆりたまの命も皆食づくどあうやひと
 葉の葉あ候ああゆのゆとあふくもむの迷ひ舞の
 命あかるるアア葉の本の下を候くえせと下さ
 せとのふふとまき葉あ打あはまどまらぬ花をあ
 ハテあの本の下を候くえらふくはら出あは又弁あ
 ちまふてくるものゆくとあうの葉あはあつと退屋
 ぶりや我等も葉へらふの葉あはあつと葉を押へる秋
 葉あせん自がえと葉の若た右和が葉の若葉とを
 へ入あける羽お二人りう花と葉つと命くもあはせぬ
 枝あふふとこの風情秋葉の葉を極めか
 備あまらふあ人自の補正が妻秋葉といふ者あ

菘が挨拶づくみおあて候者あれど志小女是は極由
 一アアふふと葉と葉と葉の葉あつこのふ葉の向か
 日次大りあうける梅櫃の本の下ふ山吹の花が
 くらとあふふと自う是く遠てふふけ山吹花元
 みるもゆりたまの命も皆食づくどあうやひと
 葉の葉あ候ああゆのゆとあふくもむの迷ひ舞の
 命あかるるアア葉の本の下を候くえせと下さ
 せとのふふとまき葉あ打あはまどまらぬ花をあ
 ハテあの本の下を候くえらふくはら出あは又弁あ
 ちまふてくるものゆくとあうの葉あはあつと退屋
 ぶりや我等も葉へらふの葉あはあつと葉を押へる秋
 葉あせん自がえと葉の若た右和が葉の若葉とを
 へ入あける羽お二人りう花と葉つと命くもあはせぬ
 枝あふふとこの風情秋葉の葉を極めか
 備あまらふあ人自の補正が妻秋葉といふ者あ

思親

十一



伝保

十三

うのつゆをさすバ氣の暮あまらうとても生らぬそ
 つちの花さつらふ夢と下さらぬうけ暇さの又さる
 縁る花とりあめつちの夜はよりあつあつその大切
 かけ山吹夢さるまことありあやうのうけ花のうけおま
 らるる山吹夢さるまことありあやうのうけ花のうけおま
 似る山吹夢さるまことありあやうのうけ花のうけおま
 根のか命ゆき散らるる七の夜を一色り守るまことありあやう
 日条縄子の命幾味方彼軍我史の作山とて言ふ

小後ゆきと捕正形討死せしとりのあまらうて款を孫る一
 つの身累かくりし正形を命を惜むおれまことありあやう
 系お果ての南朝の信為あまらうて二つゆのちの命を
 執體被是以くたるの命汝被地へ尋ね常助と
 中ん小對面一生くると申へとの申とりのあまらうて
 塔史娘ふとそけ業の暮おかと身入事りしんを
 の史の命英ひおまこと自うせらあをむせ推量しとて

表のきぬの捕子の役人勇助めけ双方より捕と
 かる腕首松を運ふ松上突ぬせが杖とあんと
 なる奴系肩突ぬ突ぬ物迄く腕車や腰車に捕車
 の尻尾小捕子もあんどく又くあつり

徳川本平記上之巻終

徳川本平記中之巻

一 東都 假名垣魯文編

第三段 宇治の續

當下勇助夢多くヤア素が今由西をあら捕
 對面のよさゆあの内いらつるとほつる中より素物
 立させあひくゆる捕正新りぐきも引とせさる物
 そつと候る家来より二人の女も牽ひせあつて捕
 獲ひるる正新優美の顔色めく舞臺が不骨

徳川

後ことば正しくりつるやう四人あつても義理ある事
 又近う親の一条紙の中にも菊の味方して
 御備と碎くとりどりの人の和せざる味方の級軍士
 年大境文を助けまゐる村三がむせす保比故を修る
 紙方後け係とかこゝろんり全くそ後のをかふる
 妻しき子細の先達と君妻と以ち中紙をるる
 の是も承ぬらんと美談をほくらひ後けまは
 勇助ちんとも己らびむせむ一柳由補承お扶助せら

是を保バ思由あくえ来美理へあつても只矢怒り
 養小余成紙をよはくま一しりや正保ん下さきらう
 いておしりくと悦ぶ婚後で夢煮く女房うけ出コレ
 ころの人をんあらとあえん命と六ハテ女の知るる老や
 あの保もうも約小あると老らえせぬ白の歯小足
 老相も御戸おあひふき南無三室男の孝え分
 らきとる子の婿げお射の後却正終ととま後一
 入り入紙ともあつて出るるまき婿婚のおせんと秋藤

をひりふ一卜男入進交き戸は小蛇て小橋せかめ正行
 せ内小橋とふ度小蛇とて殺ひるや殺るゝ實出は
 備着每人か命下受とじと守て強うを祠を和ひ命
 へ笑小よりてかろし小小よりてはせえんう命ををむ
 雨ををりふ不可雨友とすハ秋未が舞ふ意のゆゑ
 おまを若と免四人あまむお成後身代りのわいの
 中物陰よりえまむるふ年陰好といひ雨神まの舞
 小中みゆら板板何とぞか命下さるが舞が命へ助る
 お美器と竹昆ぐりの押おひ道の正行道感お思を
 ろけはく用さとの一橋おるもえせとてゆかるとあし
 ふ正行せれまままをさつて物喜ゆらむと殺ゆら
 けある二人の女をめ思ふおろふ一宮のゆりのまを
 くおのむ城南と一の糸を携へゆく舞音助を
 後くふと名を留梅子ふ蓋も殺れしあふの藤
 と舞の巻物正行同くまひ奇一集とらと押ひ
 らきえとみ候び強ゆる思ふにやまむじ前しゆいの

伊勢物語

二



大和島今秋秋篠草と引ま〜奥と奥まで
 かけりりまき清の舞臺物勇助が前山由〜
 下り〜改とさげ田又捕刺女正女公書跡とさ〜
 自舞の一巻お侍り山吹流〜のハ舞おえお
 且正女とさ〜うげお死〜とさ〜あ〜りま舞〜
 狩り引連合と正女娘の由子と公念点うぬぬ〜
 根町今ハ何やろ色む〜と舞補正女子の由流正女
 とらとの勇助一巻おの父母お〜素性お〜とさ

何とぞと何とぞ由色むけ年月念点とさ〜
 とらとの勇助を探らん舞覚えろと科と格へ女房お
 赤い念せ似つと〜と〜も我氏素性お〜
 為後正女の由〜お〜りひ〜せと色隠せ〜
 不存ハ〜子ハ〜子ハ〜子ハ〜
 申るとり〜と〜と〜の〜と〜と〜
 元舞ハ〜舞臺を〜
 公の〜名〜由〜
 伊保中

角の冥加との時着の初氣(はついき)集り紙由又(また)一子(ひとり)あり年(とし)由
 ね生(なま)似(に)奇(き)の條(じょう)子(こ)又(また)若(わか)の心(こころ)目(め)と(と)事(こと)一(ひと)葉(は)を(を)管(くだ)ふ(ふ)
 是(こゝ)汝(なんぢ)一(ひと)子(こ)と(と)け(け)正(ただ)行(ゆ)ふ(ふ)久(く)く(く)育(そだ)んと(と)思(おも)ひ(ひ)由(ゆ)奇(き)ぬ(ぬ)心(こころ)作(つく)と
 事(こと)より(より)勇(ゆう)助(すけ)孫(まご)と(と)出(で)す(す)一(ひと)付(つ)死(し)の(の)武(ぶ)士(し)の(の)老(らう)一(ひと)子(こ)を(を)結(むす)む(む)
 若(わか)への(への)老(らう)若(わか)正(ただ)行(ゆ)ふ(ふ)宣(のたま)つ(つ)付(つ)死(し)せ(せ)る(る)時(とき)時(とき)せ(せ)一(ひと)終(はら)む(む)
 り(り)と(と)付(つ)若(わか)を(を)斗(た)つ(つ)一(ひと)舞(ま)せ(せ)よ(よ)と(と)後(のち)の(の)後(のち)す(す)く(く)足(た)ら
 り(り)る(る)又(また)正(ただ)行(ゆ)ふ(ふ)の(の)初(はつ)め(め)あ(あ)ら(ら)ぶ(ぶ)引(ひ)天(あま)晴(はら)る(る)星(ほし)憲(けん)法(ぽう)が(が)云(い)ひ
 よ(よ)ら(ら)正(ただ)行(ゆ)ふ(ふ)と(と)す(す)り(り)の(の)如(ごと)く(く)作(あそ)む(む)を(を)又(また)心(こころ)子(こ)と(と)あ(あ)ら(ら)再(また)ひ
 え(え)の(の)條(じょう)相(あ)や(や)み(み)さ(さ)よ(よ)げ(げ)あ(あ)る(る)憲(けん)法(ぽう)條(じょう)と(と)世(よ)小(こ)あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)
 緋(ひ)屋(や)の(の)管(くだ)と(と)若(わか)若(わか)ぬ(ぬ)後(のち)の(の)後(のち)も(も)冥(みやう)止(とど)ま(ま)り(り)出(で)る(る)の(の)
 指(さ)籠(かご)を(を)疾(はや)く(く)分(わ)か(か)ら(ら)ぬ(ぬ)事(こと)を(を)教(おし)へ(へ)る(る)内(うち)一(ひと)と(と)あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)を(を)知(し)り
 又(また)若(わか)小(こ)若(わか)ら(ら)ぬ(ぬ)心(こころ)若(わか)若(わか)と(と)心(こころ)あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)を(を)あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)を(を)知(し)り
 正(ただ)行(ゆ)ふ(ふ)心(こころ)の(の)心(こころ)付(つ)死(し)と(と)あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)を(を)勇(ゆう)助(すけ)と(と)あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)を(を)知(し)り
 事(こと)と(と)知(し)る(る)事(こと)を(を)あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)を(を)冥(みやう)途(と)の(の)先(ま)に(に)一(ひと)子(こ)と(と)名(な)を(を)後(のち)代(しろ)ひ
 事(こと)と(と)知(し)る(る)事(こと)を(を)あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)を(を)冥(みやう)途(と)の(の)先(ま)に(に)一(ひと)子(こ)と(と)名(な)を(を)後(のち)代(しろ)ひ
 あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)を(を)冥(みやう)途(と)の(の)先(ま)に(に)一(ひと)子(こ)と(と)名(な)を(を)後(のち)代(しろ)ひ
 あ(あ)ら(ら)る(る)事(こと)を(を)冥(みやう)途(と)の(の)先(ま)に(に)一(ひと)子(こ)と(と)名(な)を(を)後(のち)代(しろ)ひ

鬼殺中

鬼田中



勇助
正行

於
克

憲
法



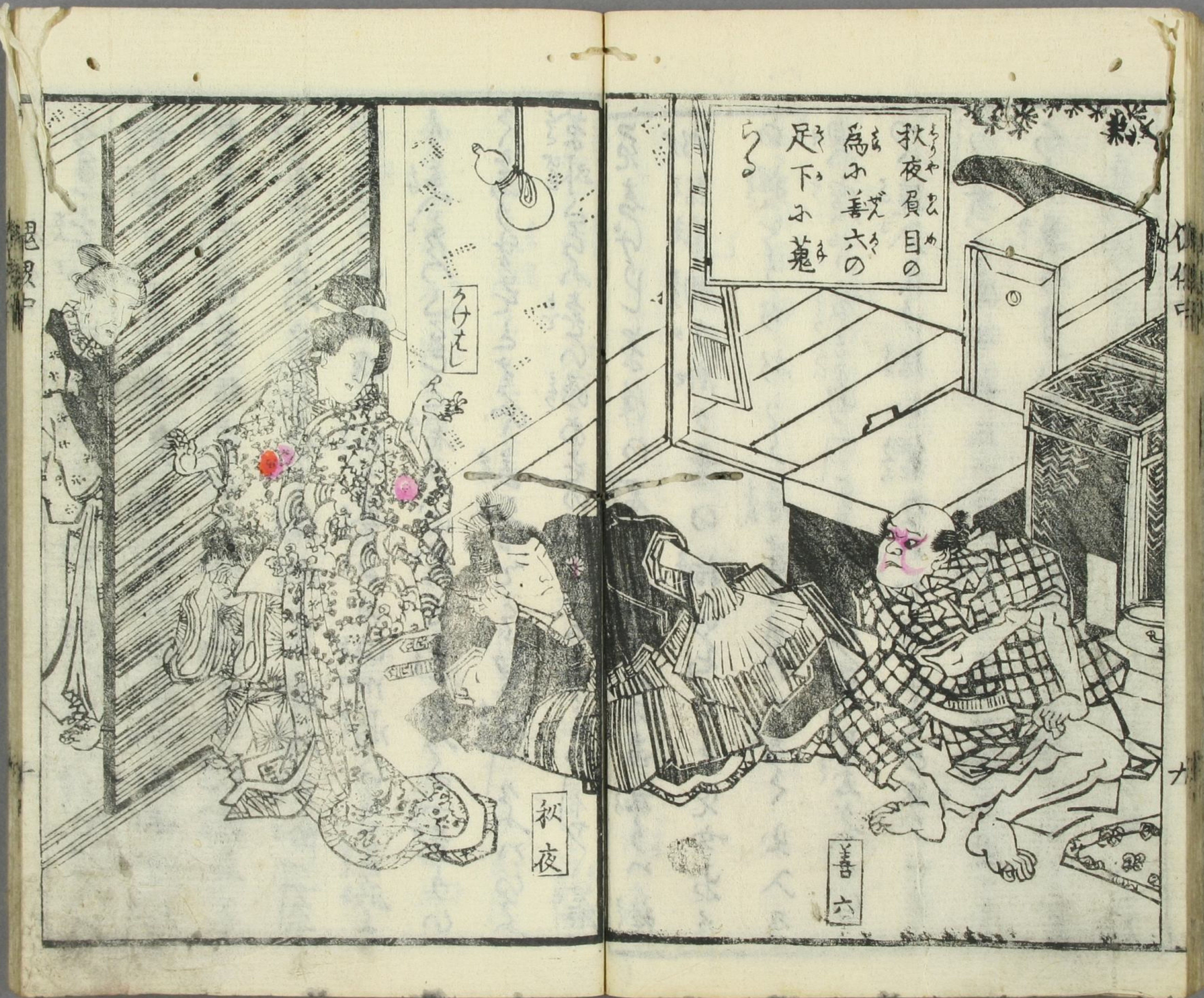
秋
志
の

憲法主君
 の遺命を
 傳へて
 卷物と正
 統小受く

休
保
中

王

性せよん為をせよせし甲斐もくもく入るる
 きまの今自今今けし六秋前もく秋場入選り補
 正形討死せしと款せ得る物あはれ死おまし正
 形へお使せ得る一のちあまといふありあく後
 死切あ人あきら死形とむせ久きびあきあおせん由
 血筋の涙袖あはるる浪浪の岩お砕るおひあり
 勇助もんとさるし一とさるちああ若若が死形
 の存を晴させんと若う方刀死よりあく秋葉繁根
 うらあつくと押させしが憲法りるるあつちアア
 出あしああするぞとあつちあつち勇助得るあつち
 しく補草の正形は四葉魂の念お付死せしあ氣が
 有ぬり我へあはれ母屋のあつち形せ得るも一のちあ今
 ありあてあおあつちあつち常服とあつちあつちあつち
 見えしあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 比級せ助るあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち



鬼
眼
中

夕
夕
夕

秋
夜

秋夜負目の
為小善六の
足下小菟
ら

善
六

小
善
六

十

兄送りくまのゆりあはるもまきのと見方表の字より由歎と
 悪とせあのみ小杜そつらする警の若六口にくまを秋夜小
 貸と金借り構りぬこひ言ふそつらむ鞠を谷秋夜小
 あもりもの酒横候るより若六むつじく月切の金
 二百あゆとせとり人どたきいあく換ふとらりとひがまち枕
 若六らあくむらうせあやし金房さ福バまらうと実
 飛くく酒のぬーサアはちか福くバ金房せりやありやうか
 あやと又酒舟遊る鞠をか池女房もさく人悪くせ兄あ
 くり秋夜候るあむらか起あるくむげとたしコヤ女
 房月が刀持くとい至いあいの奴とあ人ども切く仕しとあ
 んすりえ鏡か鏡かテあ何せ程様しを運あつる程け秋夜が
 可し三まのくし不し著あまの切く仕しと母就があ葉あり
 一掃し獲しへ出且六秋夜しへしたし若六があ小あ振出し由分の
 うらりの貨物と立流し赤し伺しの辞しゆさあ真しゆしとしたしる母
 女房し鞠しくし伺しあしらしりし若六しへし著しとしんし比し金の
 御しましぐしけし刀し若しらしりしとし換しぐしとしらしふしゆしとしらしくし

見方

十一



鬼
中

鬼
中

老
母

か
け
花

善
六

秋
夜

我子と
 殺し夫の
 大事を全
 させんこと

十一

南無河津院仏の寺りろとも丁とゆふるまの池小娘
と共ふ四ツの糺す可きや孫を史のたつめやう
らま中をぬ女房とけしつらつとあふ孫と我子の死
糺歎さふ流む湘川流き瀬とをろりあたり

傀儡本平化中之巻終

傀儡本平化下之巻

東都假名垣魯文編

菊又雁 寄系の廊

海をさる死の船由深渚小橋奇せり流系の文句ハ
雲の船白帆かさを扇子のね梅屋亭まへ刻を待
命の辻ははしと見えそせぐ柳橋由一橋小對の形列
狭糸指也を鏡の大き氣解く流まの玉川がお化
とりハ百万石かゝる例ハ又世中も嵐小白ふ梅が香の



鬼



常悦一瞬を
預け玉川
底意を試
む



鬼

仙

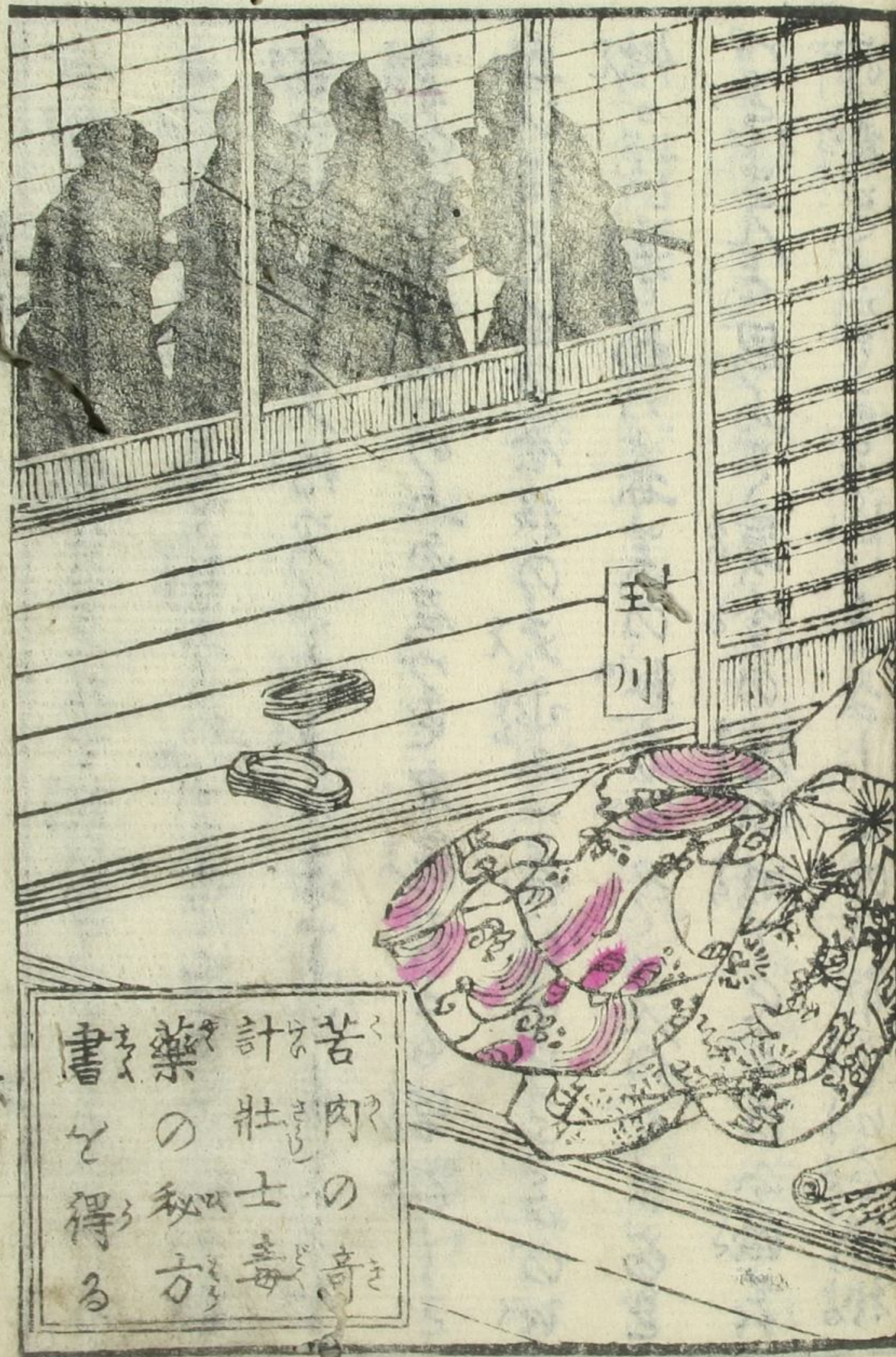
こまをたぢる常徳の曾小遠のさるさるの歌イマ
さるさる後へのけ刀もさる素性を知りさるさる大
外の西郷の思案ト玉川板所とひつらる教院
念せおまへの幫守の作次板りのる小一橋を被小隠
せがそのまを押し書きひさるるヨリヤ妹とひつらる
玉川二交ひつらる「ヲ響るはた理く始く名」のる
兄弟念長おぬの父永井及堀の善川の市代
母ハ娘小若本の死望り暮色のり死は切後小
徳る前此巻終のわ懐めくニ々娘のわ命ハ助きどよ
家の後後日の外史婦一お小居るの叶り老あふ
さの別き母ハ初産血の上より別き根小伏志の
世祖父の世し父のり父と等しくお母を尊
とさるは情や常徳がけく三退南岳三宝ある
けけ款をけけと奉返持とさるさる久本重送
るが及への孝又さるの後妻の後へつれど
妹親の親さるさるぬ及らつらふてお命長せ

鬼界

日

いと是もすて色んぐ居りの中と後をらぐ血筋乃
 思ひ妹も佐小志やうあげしと極のか世しく先さ
 るとの等々まどかまじ麻の一寸も善あも志すぬ
 妹けよハカを念せとさんの仇常脱せサアを中付し
 くと下さんせとさんと申小後脱む障子の内小常脱が
 四天王と頼んぐる八尾半六和田新三糸見北友
 志常源八二人の咄等とも考へた司や妹住て居る
 不毛の色のあまのせ海を勸誘入る雨と云家の後せ

一彼が力どく只一付見が後脱ふおく居る必さ急る
 ま可い念と物物籠の編とひくりと云後の際
 子母るとん念を頼と頼一ア常脱とせ付んと云あつ
 くのり勇けり子速と云と云換入る居るが司
 二番二宝と傍ある力あるありおく我が後入実子り
 さぐり是のママ子まるとは自害と云身歎け六司
 妹家子のを歎小悟らまての一生歎付り叶はせけ
 佐小結果んより死しく末集の父母入後歎と云ると



書^く薬^り計^は苦^く
 と^の秘^ひ壯^{さう}肉^{にく}
 得^える^る方^{かた}毒^{どく}奇^き



作次

五

若痛の原を「方神」の元板を起し「さうらう」の元を
 「けり板」の元板を起し「さうらう」の元を「サア」の板の元板の元を
 雲の影を起し「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 骨の中を起し「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 思ひ起し「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 儼こけ「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 べらんと思ふ「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 押裁き「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を

とひく「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 子柄「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 く「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 か「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 玉川「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 且「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を
 の「さうらう」の元を「さうらう」の元を「さうらう」の元を

さんの歌のうらみ付きくらゐる心をうらみ細い糸
 へ念をいすの再び南朝の代ひひくさんと心を碎く
 け常規尋求むる毒業の軍用のその一ツに後
 後同撫念ふと和ひ屋へけぬき衆と多りの父が毒
 業の秘方を知つてが月の毒業密ふと多り尋むと
 りうらむりの糸は後取の撫念をけらむらむらむら
 ぐらけん毒肉と求むるはと多りの方へ傳へて毒書
 中へ及ぼすは一橋おるしり一ツの方後常規とて歌
 とりの色後づらりの見事とならむらむら毒業命歌を

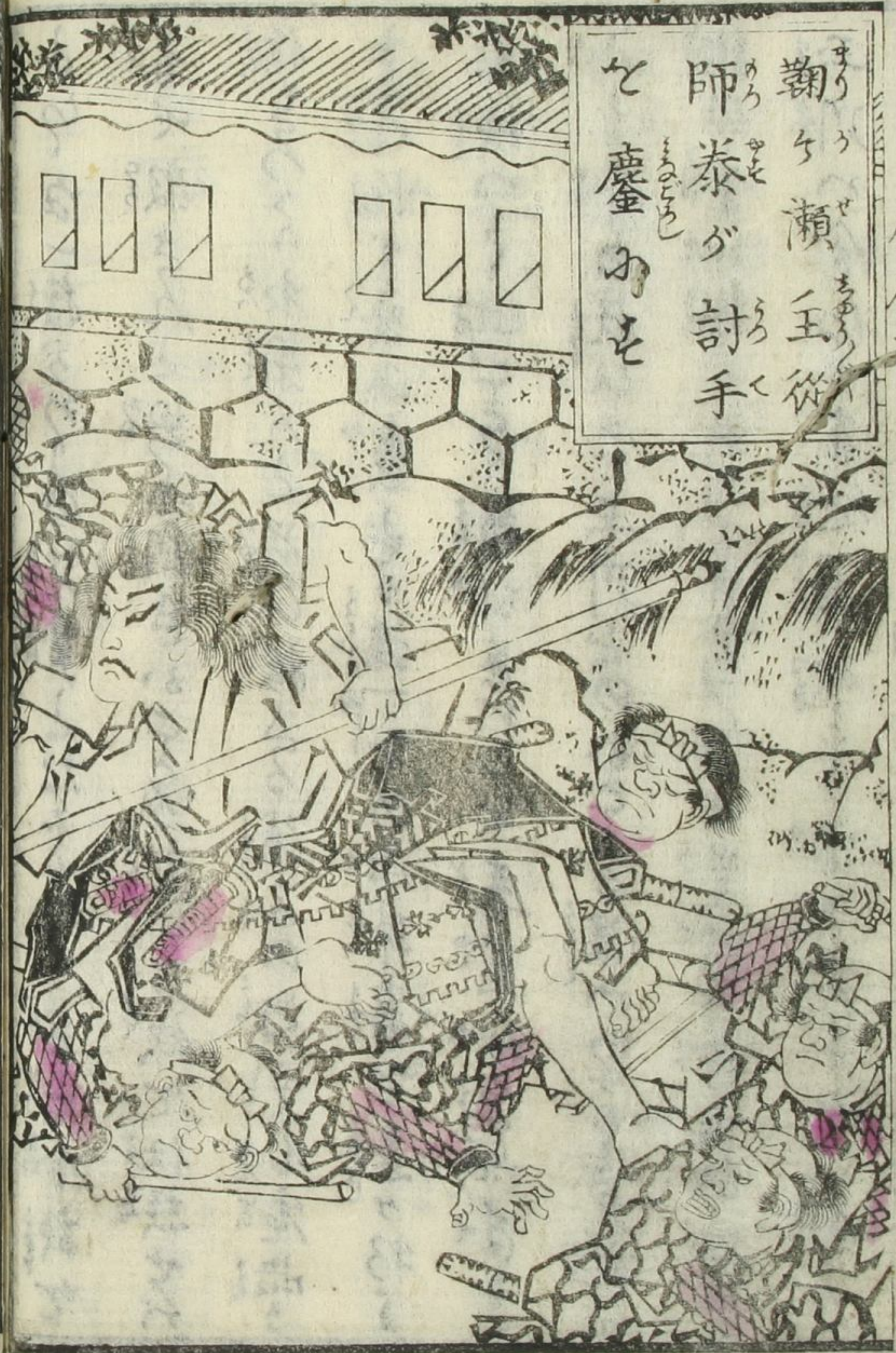
毒を殺さんと思ふ利きかたを毒計方後を仕様せむ
 後らうらむら果んとおのけらるる子の因り心を惜り
 毒後が愛ふ念むる毒業の心毒業を業せむら
 く後つとけむら後ぬきむらと毒業秘方後を
 入る今の後ひこ玉川どのおとを後いりむらり歌の
 歌の念後を業せむらと是後の新思ひ切ら
 玉川の念後を業せむら一橋おるしり首おる女を女の念力

鬼界



鞠ヶ瀬玉まろ 師うし 泰やす 討う 手て
 七しち 塵ちり 小こ 石いし

伊保



可なりと云ふ事ありと云はれぬが如く此の卜口人の勇士もさう
出さるるの事なれば秘方今日此まふ入らばに時由り
秘方の手分「成程」宝町ハ鞠ヲ蹴秋夜ヲおぼせ
定め時分をさうするに毒菜白川野川堀川の川
りろびしうけさる除毒一味のやりの慶登「我々の八情
の里」さうし「まゐるイサ角」と玉川引立真水入
群りある捕まて人の者や追ふ事「謀殺の張本
治の常況」若川が軍法少く解さる別列ち捕ま一
のやうさう透さぬと世に世に世に小から入り常況ハ
東改めよる二階の橋先小うけさる風鈴引ちさる毒代
の手の内さうり石火炎碑ハ落る用水の毒さうり
る秘方の毒菜捕まハ砂を死出の山「市賣
べ試のけ毒菜探殺のま娘めイサおととさう
中りさうさる門出の依ハ口人の武士死骸と一
城を公の念珠石清水八情をさしおとさる

第六卷

天下太平

尾見下

初め常流秋夜が深敷具皇座後ま糸が解人小
 依る奇歌の対子へ言外赤鞠ヶ殿ヶ屋敷の屋方
 せ捕手の多智彦家の如くむらぐまに天地の介小
 出人のあつた今で必死の秋夜が働き留手の鑑
 鑑察手小百人あぐまひらく手殺手の奇手剛横
 徹察小お砕く色さると引虚せ奇霧が追つま
 づ大ららるる垣二人り小切まつら色外赤が紐子の
 着跡るせ中とじと進くけ物小動せぬ跡跡は物

掲げらるる秋夜が働き見送るて又後ま糸業内
 小殺多の紐子二人の女捕入るとあめのかかるせ様ぐ
 ひろりとそを燕の糸で星を小振小母親がひるむ
 不へ解返双先年小似合ぬ手練の子業あそむせ
 うけ寄るうけにしが物打の大紫装束具皇座紐子あ
 方へ口つ小ぬく倒るせ兄向由中へは働さるる八
 瀬小の常流が西谷の坊の言掛小よりくつ後ま鬼
 門の言掛しと雲まかほむと解てさうを雲ひん



常此鬼門
雲氣を小して
隠謀露頭せ
と察起

と物ふとさるる意の隠儀秋夜うまより涙を

必定「川」天あるる命あるると志をくくえと

入ふりり初て常悦至終味なる運寄旅の上

うらひ今ぞ路の色の刻常悦の上は小物の具

勝必死の祝卦三分は言強居る勇士弓矢小

かゆ虫柄の純子送めめらうとるた初の活意

象あゆまじり死よしねもやある縁波の夢は

人の勇木のまをさし我こが付手のやうをらるるを

鬼哭下

十二

く奇せしとて之くうけ候果んハ云々のらう一あて
當人常況公と相由せんと申り雄の權をさすてけ
り引遠く入来る奇事の大方石堂を建其
具ふあふぬ者獲弓矢携へひくうり常況おほく
引矢あつた獲負せ一矢お交せんと一回おつひよ
つひらてぬつ矢俾ハ案のまの内せうとせあつら
の辨別尋せ念とて矢おと矢お石堂をて携へさ
足見ハ書簡おあふぬ和の一字常況ハ矢ううるげ

於け一通ハ常況ハ命の由教書するふ及びを懸へ
何百子獲奇せうりともお破るハ安々れと雨なるを携へ
命何勝うんと明智の先え石堂大と家威トハ今
此處分射うけ一を南水あ初和隣の和の字け
洞ふようの死さるふ及びぬ正行公一ヤア正行ハ先
之付死せしとて忘る我ハ天下の縁救の法をゆえ
日法を常況ハ首より由ぬお後を獨ありと後
せひしけが川が毒地のはを透せし公地田人の

鬼界下

十三

勇士も奮然必死と極老く抱くより所堂のひ
 こまらふ懐心智術の今の儀列和勝の子と
 儀一ハ何人の勇士ハ冥途の先強我あつてと
 押統めさぬ老と抱る運後の定約古今小唐し
 ぬ人ガ切先費く後玉川の懐徳の子ハ奇子の
 大羽仇由故由我と身と天下小持する岩院ガ定約の
 経どけりける運後の宣も弓おて院小抱く引後を
 大幕の中央ハ侍従之助氏満利信公の代名代官降
 悉くくふ小抱抱小抱くくかふる重々重川程之再後
 の付小秋夜を生捕りあるをく引是る小降小付小
 の段目仕換する業極中を色秋夜小對して盜賊より
 里鞠ヶ流車編の服をえひく盗賊あるを奇怪あり紙ハ
 南畑二代の右良本名彩田義興あるを正統と正合せ
 運後とぬく彩田あるを和義綱ハ女子の兒を汝
 等如きを知るよりあるをり小降恭居史言「天下
 参双の大悪人史水の橋間志く自人と奇るを氏満

愚問下

一四

忠の西亭一昨暮が及運公の著るものよりよく著せり此を
 天の細粒之よりよく申す」と上巻小序著るものにて
 「モウ百年来めと氏満公小切うくまが粒之よりよく著せり
 ころけくまがく小切う合せ」と純善傳今とを燃乃
 悪人退治巻も巻を新田楠とツの男の里利小納る
 市代とをめくころけくまがく
 傀儡太平記下之巻 大尾

假名垣魯文著作

歌川國周畫圖

蘆屋道満
安倍童子

報雙言信太森
前後二巻

俵藤太龍宮辰虫話
全一巻

平良門蝦蟇物語
全一巻

楠正行
二代功
傀儡太平記
全一巻

於登美
與三郎

氷神月横櫛
前後二巻

忠勇景清入玉傳
全一巻

書物地本問屋 錦森堂

馬食町二丁目
森屋治兵衛

己亥十月
三
求
谷
治